

鈴木鎮一先生・信念にもとづく音楽教育

そこには、学問への情熱、ペンに生きようとする者の気概よりも、社会を生きるための効率がまず支配していることを知らされたのだが、今さらこんなことで驚くのは、私の方がどうも野暮であるらしい。

入試とは、人生でほとんど唯一の平等な試練の機会であるのに、その入試の弊害のみを強調するマスコミが、合格者の学校別ランキングを年々ますます派手に競って報道し合うという倒錯した風潮のなかで、他方では、教育の機会均等とか平等とかが流行語のように唱えられ、学校群制度が次々に導入され、小・中学校の運動会の賞品は一等も五等も参加賞として同じという誤った「平等」観が蔓延すればするほど、若者たちは、人生に効率だけを見出そうとするのではなからうか。

教育の理念とは、そのような誤った「平等」観に基づく薄っぺらな「参加の思想」などでは決してない、と私は考えている。

——『月刊教育ジャーナル』一九七四・七へ教育随想

### 鈴木鎮一先生・信念にもとづく音楽教育

わが国には、例年三月下旬の東京において、世界に誇ることでできる素晴らしい文化的な祭典が繰り広げられている。国際化時代の日本が対外接触領域のなかに文化外交を大きく位置づけるべきことが叫ばれているが、ともすれば、その場合の文化は、いつも生け花であったり、茶道であったり、といった次第で、それはフジャマ・ゲイシャ日本論のようなものになりがちである。だが、ヴァイオリンを手にした満場の子供たちがきわめて高い水準において演奏するバッハやモーツァルトの大合奏こそ、現代日本を代表する文化ではなからうか。

私はこの春、武道館で開かれた才能教育研究会の第二十回全国大会での子供たちの演奏と鈴木鎮一先生の今も変わらぬ姿に接して、このような感想を改めて抱いた。

今日でこそ鈴木先生のヴァイオリン教育は、その目覚ましい成果とともに日本といわず世界に知られているが、あの戦後の荒廃のなかで、信州・松本に松本音楽院を創立された頃は、ヴァイオリンを持ち歩くことさえためらわれた雰囲気であった時代であった。

私が初めて鈴木先生の指導を仰いだのは、昭和二十二年一月、私の小学校四年生のときである。鈴木先生は、すでにこのとき、江藤俊哉、山本恵子（故人）、豊田耕児、小林武史・小林健次兄弟、鈴木秀太郎といった今日の国際級ヴァイオリニストを育てられ、とくに、戦災孤児であった豊田耕児氏を「わが子」として家庭に迎えておられたのであるが、そのような鈴木先生は、信州の美しい自然環境こそ、音楽教育にもっともふさわしいことを発見され、戦後の松本にその本拠を置かれて今日にいたっているのである。

鈴木先生のヴァイオリン教育について語るのは、私の任に耐えないことかもしれない。なぜなら、私はヴァイオリンの道を職業として選んではないからである。だが、鈴木先生の才能教育はヴァイオリンの天才のみを育成することに目的があるのではなく、どんな子供でもバツハヤモーツァルトの音楽に自ら参加できること、いわば音楽の普遍的な精神を等しく解放することに、先生の一貫した姿勢があったように思う。

先生のレッスンはある意味では厳しかったといえるが、子供たちにヴァイオリンのテクニクを習得させるために、先生の号令で運弓（ボウイング）を変化させたり、暗譜した楽節を曲の途中から突然弾かせたり、そういったヴァイオリン・レッスンのゲームによって生徒を導く手法は、本当に興味つきないものであり、また優しさのこもったものであった。楽譜も重要だが、すべてを暗譜してはじめて音楽を自由に行うことができることを、鈴木先生は知らず識らずに教えてくたさった。この方法は、外国語教育にもそのまま通ずるものである。

鈴木先生は決して生徒をしっかりとつけることはなかったが、「ヴァイオリンは一日弾かないと二

日分退歩する」とよく言われたものである。

このようなあくなき反復のなかに、偉大な音楽の精神を体得させること、それは同時に人生のたたかいいにとっても、もっとも基本的な教訓として、私の幼少期から青年期を支える人間形成のための一つのテコになったような気がする。

——『月刊教育ジャーナル』一九七四・一一（思い出の教師像）